

不完全な道具としての言語・貨幣？

@阪大数理経済ジョイントセミナー by 塩谷賢

① 学問の仮定：メタレベルでの十分成熟した（研究）主体

- ・一般に学問は「反省」という契機に大きく依存していると思われる。
- ・「反省」は反省される対象・過程・事象とは異なる位相にあって、反省対象の活動・傾性・潜在性には直接には連動していない。
- ・「反省」は反省対象の（論理的／合理的／文脈的）可能性を吟味し、可能性の構造を明らかにしたり、可能性の間の（新たな）関係を考察する。
- ・このように反省するときの思考はある種の規範（論理性・合理性・法則性 etc.）に従っているように思われる。
- ・これらの規範性は反省主体が生きる社会において、十分に成熟した主体が実存において身に付けるものとして体得されたり、成熟した主体によって教育・訓練されることによって得られる。
- ・それゆえ学問の研究主体は、自らが属する社会と歴史的な文脈に根底的に依存しており、かつその社会での十分に成熟した能力によって反省をおこなう。

② 反省による構築と現実の生成のギャップ

- ・成熟した研究主体による反省対象の構造の構成は、主体の能力・視点と主体が従う規範性にマッチするようになされる。しかし、反省対象自体の活動との連関は可能性・条件を通じた間接的なものであり、その可能性も反省主体の側から評価された可能性である。（cf. E.カント『純正理性批判』）そのため、主体によって構成された反省対象の構造は対象自体の現実化メカニズムとずれており、現象的な状態における一致が期待されるにすぎない。（cf.AIによる知をどう考えるのが妥当か）
- ・反省主体と反省対象のこの動態面におけるギャップをどのように埋めるか、そもそも埋まるものなのか、は議論するに値するものであると思われる。

③ 主体の動態性を制御・調整から考えること

- ・先述の問題は、反省＝対象の（可能性・条件に基づいた）把握、という図式から生じているとみることができる。
- ・ではなぜ「可能性・条件に基づいた」ということが含まれるのか？それは主体が対象と（これから）相互作用や共同行為を成していく際の条件として活用されるからではないだろうか？
- ・すると主体にとって「反省」はそれ単独で働く機能であるよりも。後の自らの行動とその結果などについての注目やモニタリング、計画、修正（可能性）といったことと結びつくものとして考えるという方向が考えられる。

・このことは（これからの）相互作用や共同行為ということにおいて、主体と対象が現実的・直接的に絡み合っていく次元を基礎とすることを含意する。

・この図式を現在（自立的に存在している（と思われる））対象についても適用することができるのではないだろうか。

#### ④ 制御図式（口頭で）

#### ⑤ 制御の前提と含意

・制御には成功・失敗がある。通常は外的に与えられた目的によって成功・失敗の判断がなされ、その評価が制御の次のステップに影響する。とくに失敗は修正や新たな方策の検討・計画全体の放棄の可能性など、制御の実行に大きな変更を与える。その一方でサイバネティクスやオートポイエーシス、自己組織化など、部分的に様々な制御を含み全体性を与えるようなシステムは、成功をスタンダードとした構造化である。というよりも成功しないとその特定のシステムは成立しない。しかし、そのシステムを概念として捉えるときには、成功モデルのイメージのみからの考察では不十分であろう。システムの失敗はそのシステムが埋め込まれている上位システムや文脈に大きな変化をもたらすものとして、考察すべきものである。

・その意味では制御の連絡性・ネットワーク性を考察することが問題であり、この次元での制御（高階制御）と修正による実効性への影響と回収（代入による実施システムへのグラウンディング）の垂直的（むしろ斜めの？）ダイナミックスを考慮すべきであろう。（cf.C.S.パースのプラグマティズム）

#### ⑥ 制御と道具

・制御の実行（というか実行と計画のハイブリッドとして制御があるといえるのだが）においては様々な機能を実現する機構が必要である。機構は制御の部分的な可能性を担う現実的なものと考えられる。物理的レベルに存在する素朴な機構として道具が考えられる。道具はその機能が様々に異なる制御文脈に組み込まれ得るのみならず、物理的存在として全く異なる機能を（それぞれの場面において）実現しうる。我々は道具をその標準的な機能において認識し、道具としての最小限の同一性を標準機能の実現において判断している。それゆえ全く異なる機能が発現するのは、標準的機能の発揮、それによる制御の部分的な失敗においてであろう。M.ハイデガーは、道具は機能において透明化し、不具合が生じたときにその存在が垣間見られる、とした。M.ポランニーは道具の使用時に意識はその使用対象に対して焦点的な認知をなすとともに、この焦点的な認知を成立・維持するために、焦点を取り巻く周辺である環境、使用者の状況や実行状況の変移にも注意を払う（意識的でも無意識的でもあり得る）として、それを周辺の覚知と名付けている。そして周辺の覚知に注意をあてて焦点化してしま

うと、周辺としての補助をしている諸作用の複雑な絡み合いが分離され、現象学的な性格が変化してしまう、としている。またこの焦点化においては更なる周知的覚知が必要であり、焦点化の過程は一種の無限後退になってしまう、と考えられる。これはウイトゲンシュタインが「規則に従うことのパラドクス」として議論していることと相通じるものがあると思われる。

⑦ 道具の特殊性：物的な凝集性と概念的な延展性

・道具には様々な使用可能性が存在している。しかし道具をはじめから使用の多様性があるものとして認知しているのだろうか？むしろ、ある特定の制御の実行における不具合から道具を修正したり、使用の仕方を工夫することにおいて使用文脈とそれに応じた使用様態を徐々に広げるといった経験がもととなって、使用可能性が獲得されるのではないだろうか。

・このとき物理的な支持体をもつ道具はその物的な安定性から特定の使用における周知的覚知を支える一部を保持しており、使用文脈の変更における機能の汎化を促すように思われる。この汎化は道具の機能の階層的な分類構造へと向かい、その（概念的抽象化における）高次のレベルでの性格付けは、その機能を実現する提示（具体的）な道具を物理的な類似性を越えて同一視することになる（概念的な延展性）。このとき機能概念が実際の使用から相対的に独立し、機能の多様な実現を支えるものとなる。これによって機能を実現する道具を離れ、機能そのものについての関係性や制御での使用や評価などが可能になるのではないかと思われる。

⑧ 機能の自立と周知的覚知のシフト

・機能が概念的に自立すると、その概念を参照するときに必然的に意識的に焦点化されることになる。そのときに周知的覚知はいかにして与えられることになるだろうか。